



鋼の城壁 『残月』

【旧式極太デバイスが子宮を挟る激痛と絶頂♡】

【第1世代機の激闘！気高き姉の誇りと祈り！】

【後の悲劇へ繋がる、**残火**の前日譚】

生体ユニット・機械姦・快楽落ち・尊厳破壊

本格ディストピア戦闘メカアクション・ハードSF

著：XYZ_L

鋼の城壁『残月』

～カテドラル・ノース防衛戦～



女の子を生体ユニットにして使い潰しちゃう系
ディストピア・ハードSF・メカ・バトルモノ
「オルガ・コード」シリーズ

著:XYZ_L

第1幕:誇り高さ鉄塊と純白の祈り

聖暦2023年秋。

旧欧州西海岸、セラフィック・オーダー第4防衛拠点『カテドラル・ノース』。

『——主の迷える仔羊たちよ。神聖なる教義のため、穢れた鉄の獣どもに鉄槌を下しなさい』

頭上のスピーカーから、澄み切った音声が響き渡る。

それは地上の安全圏——ステンドグラス越しに神聖な光が降り注ぎ、無機質に微笑む美しい聖人像が並ぶ、空調の効いた白亜の大聖堂からの通信。

自らは血を一滴も流したことのない、男性高位聖職者の傲慢さが滲む声だった。

重装甲突撃中隊の小隊長を務めるルナ・ステリオンは、大人たちの虚飾に満ちたその音声が響く無機質なスピーカーへと、冷ややかな視線を向けた。

ここは偽装された大聖堂の地下深く。

焦げた廃油と安っぽい消毒液、そして鉄錆の匂いが常時充満する、旧文明の廃墟を流用した広大な格納庫である。

錆びついた換気扇がカラカラと乾いた音を立てて回っていた。

薄暗い空間に整列しているのは、待機用の降着姿勢で膝をつき、分厚い多重チタン合金の装甲で覆われた第1世代重装甲機。

少女たちの命と快楽を動力とする無骨な人型オルガマシン、SO-K型『ケルビム』である。

洗練された流線型のフォルムとは程遠い、二足歩行の重鈍な鋼鉄の巨人。

左腕には、機体の半ばを覆い隠すほどの巨大な多重チタン製・大型防盾（バリケード・シールド）がマウントされている。

対する右腕には、大質量の実体弾を撃ち出す無骨な『90mmヘビィ・アサルトカノン』が重々しく握られていた。

さらに背部のウェポンラッチには、白兵戦用の極厚の斧槍『ヒート・ハルバード』が固定されており、次世代機が持つようなスマートな光学兵器の気配は微塵もない。

かつて神聖な純白に塗られていた装甲や盾は、無数の戦闘による硝煙と泥でくすんだ灰白色に変色している。

しかし、それは決して遺棄された鉄屑ではない。

入念な整備を受け、今日も最前線を血と泥で支え続ける教団軍の誇り高き現行主力機であった。

ルナは純白の極薄パイロットスーツの胸元——その豊かな谷間に深く挟み込んでいた、首下げ式の小さな防水ポーチを引き出した。

折りたたまれた1枚の便箋を開く。



『お姉ちゃんへ。今日の配給で甘いドライフルーツが出ました。お姉ちゃんが帰ってきたら一緒に食べようと思って、私の分はこっそり瓶に入れて取ってあります。怪我はしていませんか？私も早くお姉ちゃんみたいな、立派で強い聖女になりたいです。セリナより』

後方の訓練施設にいる、まだ戦場を知らない妹から届いたばかりの手紙。

そのたどたどしい文字を指先でそっと撫で、ルナは再び便箋を丁寧に折りたたんでポーチへ収める。

淡い桜色の長い髪を束ねたルナの瞳に、揺るぎない決意の光が宿った。

「ルナ隊長。全12機、最終チェック完了しました」

生真面目な声と共に歩み寄ってきたのは部下のミリアだった。

金髪をきっちりとシニヨンにまとめ、ルナより年上の年齢でありながら、最前線を率いる若き天才パイロットに対し、深い敬意と絶対の忠誠を向けている。

「ご苦労様、ミリア。サフィラも準備はいいかしら」

ルナが視線を向けると、降着姿勢をとる重鈍なケルビムの傍らで、副隊長のサフィラが優美に微笑んだ。

20代前半の彼女は青い髪を緩く編み、パイロットスーツの上からでもはっきりと分かる豊満な肢体を揺らして頷く。

そして、機体と共に低く下ろされた巨大な防盾の表面を頼もしげに撫でた。

他機よりもさらに分厚く、過去の無数の弾痕が重なって黒ずんだ特注の盾だ。

「ええ。いつでも行けるわ。一番キツい衝撃は、私がこの『盾』で全部引き受けるから.....貴女は安心して、前だけを見ていなさいな」

目標は、すぐ目の前の沿岸部に建設中の連合軍無人機補給プラント。

これを物理的に粉砕しなければ、圧倒的な物量によって、このカテドラル・ノースは数日のうちに呑み込まれてしまう。

「隊長。出撃前に、コンデンサーの圧は限界まで高めておきました」

年老いた整備長が、オイルで汚れたウエスで手を拭きながら声をかけてきた。

3年前、初めてこの狂気の鉄塊に乗り込み血と涙に塗れて帰還したルナを、誰よりも痛ましい目で見つめていた男だ。

その顔には、年端もゆかない少女たちを過酷な戦場へ送り出すことへの、隠しきれない苦悩が今も滲んでいる。

「だが、無茶だけはしないでくれ。敵の弾幕を受け止めれば、凄まじい衝撃が機体を揺らし、極太のオルガデバイスがあんたたちの臓腑を容赦なく突き上げる」

言葉を区切り、整備長は油まみれの拳を無力に握りしめた。

「あんたほどの腕なら、あと少し待てば中央から負担の少ない最新鋭の『セラフィム』が回ってくるはずなんだ……」

だが、ルナは気高く美しい笑顔で首を振った。

「いいえ。わたくしたちが今、この無骨な鉄塊と盾で前線を押し上げなければ、明日の防衛線は守れません」

彼女は愛機であるケルビムの、傷だらけの脚部装甲を愛おしそうに撫でた。

「わたくしたちがここでこの痛みを引き受けるからこそ……いつか、あの子が戦場に出る頃には、血も泥も知らない『美しい翼』で空を舞えるはずよ。これは、わたくしたちの誇りなの」

そう言い残し、ルナはケルビムのコックピットへと登っていく。

機内は、いつか妹に与えたいと願う『痛みのない翼』とは程遠い、極めてアナログで泥臭い空間だった。

スマートな全天周囲ホログラムなど存在せず、正面や側面に分割配置された分厚い液晶モニターと、無数の物理トグルスイッチが狭い密室を圧迫している。

冷たいセミ・リカンベント方式のシートに身を沈めたルナは、両腕のアームレストに固定された重い油圧式の操縦桿を力強く握り込んだ。

「システム起動。オルガデバイス、接続します」

ルナが物理レバーをガコンと押し込むと、計器類の真空管が電力を奪われて明滅し、補助バッテリーと油圧ポンプが苦しげな駆動音を上げた。

旧式機のコールドスタートは、補助バッテリーの細い電力だけでは足りない。

微弱な初期電力は、機体そのものではなく、パイロットからエネルギーを搾取する『生体増幅器』のみを強制駆動させるために使われる。

パイロットから強制的に搾り取る最初の絶頂。

その爆発的な生体パルスを生火（イグニッション）にしなければ、巨大な主機（オルガエンジン）は目覚めないのだ。

ギアの鈍い軋み音と共にシートの中央からせり上がってきたのは、酸化して青錆や黒ずみが浮いた極太の真鍮製オルガデバイスだった。

それは、噂に聞く最新鋭機の洗練されたインターフェースとは似ても似つかない。

ただパイロットの生体エネルギーを暴力的に搾り取るためだけの、
無骨な円柱である。

逃げ場のないシートに固定されたルナの秘裂を、油圧に任せた真鍮
の突起が容赦なく押し開く。

「あ、があっ……！」

初めてこの不格好な機体に乗込んだあの日から3年。

この狂気のインターフェースによってとうに処女を散らし、血と愛
液を流し続けてきた熟練の肉体であっても、事前の手作業で塗布さ
れた冷たい工業用グリスだけでは潤滑など到底足りない。

真鍮の乱暴な侵入は、乾いた摩擦と強烈な痛みを伴う。

秘裂を強引にこじ開けられ、神経の結節点である最奥の子宮口に冷
たい金属が深く突き当たった瞬間——機体は種火を得るべく、問答
無用でルナの脳髓へ最大出力のスパークを叩き込んだ。

「あ、あああああああっ！！」

出撃前にもかかわらず、ルナの身体が弓なりに反り返る。

強制的な絶頂によって、豊かな乳房がシートベルトに押し付けられて激しく揺れた。

少女が犯され、搾り取られた爆発的な生体パルスを点火プラグとして、背後のオルガエンジンが、ズウウンッ！！と腹底を揺らすような咆哮を上げて目覚める。

全身を貫く絶頂の余韻と火傷のような熱感覚に肩で息をしながらも、ルナは強靱な意志で下腹部の疼きをねじ伏せた。

濃密な雌の匂いが、狭い密室に充満していく。

サイコ・ミューによる電子的な補正はない。

機体の反動や重い油圧の抵抗は、ガタガタと震える操縦桿を通じてルナの華奢な腕にダイレクトに跳ね返ってくる。

アナログな赤い警告灯が点滅し、鉄の棺桶のようなコックピットを生々しく照らし出した。

汗に濡れた素顔は瞬く間に紅潮し、苦痛と快楽が混濁した涙が瞳から溢れ出す。

「全機、出撃……ッ！ わたくしたちの、誇りを見せるわよ！」

強靱な意志で機体をねじ伏せるようにペダルを踏み込む。

MFDの片隅に映る緑色の低解像度モニターが明滅し、ノイズ混じりの無線機越しに、彼女の艶めかしい吐息が部隊全体へと漏れ伝わる。

通信機からは、ルナと同じくインターフェースの痛みに耐えるサフィラやミリアたちの、微かな喘ぎ混じりの「了解」という声と荒い息遣いが重なって響いた。

12機のくすんだ灰白色の巨兵が、巨大な防盾を構えながらドーバーからの冷たい海風が吹き荒れる地上へと、重い足音を立てて進軍を開始した。

第2幕:鉄の暴風と、ささやかな果実

地上に出た瞬間、ドーバーからの凍てつく海風が、ケルビムの分厚い多重チタン合金装甲を打ち据えた。

しかし、それよりもはるかに濃密で暴力的なものが、視界の先から殺到してくる。

沿岸部を埋め尽くすように展開した、80機にも及ぶ連合軍の無人量産機『ハウンド』の群れ。

黒鉄の装甲に身を包んだ無機質な狩人たちが、AIネットワークによる完璧な統制下で一斉に光学兵器の砲門を開いた。

「敵影、多数……ッ！ 飽和攻撃、来ますわよ！ 全機、防盾展開！」

ルナの叫びと同時に、12機のケルビムが左腕の大型防盾（バリケード・シールド）を一斉に前面へと押し立てる。

直後、数え切れないほどのレーザーの閃光と短距離ミサイルが鋼鉄の小隊へと降り注いだ。

着弾の凄まじい衝撃が、分厚い盾を激しく揺さぶる。

サイコ・ミューによる衝撃緩和を持たない第1世代機において、盾が受け止めた莫大な運動エネルギーは、すべて旧式のアナログな油圧系への強烈な過負荷（サージ）となつてのしかかる。

ガァンッ！ と機体が大きく軋んだ。

後方へ押し倒されそうになる45トンの巨体を踏みとどまらせるべく、機体は姿勢制御のための莫大な出力を、パイロットの肉体へと強引に要求する。

足りないエネルギーを強制的に搾り取るため、シート中央の極太の真鍮製デバイスが凶暴に跳ね上がり、ルナの子宮口を容赦なく乱暴に突き上げた。

「あ、があっ……！ あああッ！」

大盾が敵の弾幕を弾き返すたびに、熱を帯びた真鍮の円柱が彼女の柔らかな最奥を限界まで抉り抜くようにピストン運動を繰り返す。

密室には自身の愛液と焦げた作動油の匂いが充満し、荒々しく肉が擦れ合う鈍い水音がコックピットに響き渡った。

それは洗練された次世代機の同調とは違う、ただの物理的な蹂躪だった。



火傷しそうなほどの熱感覚と、強制的な快楽のスパークが脳髄を焼き切ろうとする。

『ルナ……ッ！ 敵の弾幕、激しすぎるわ……！ ひいつ、盾が押し込まれ……っ、あぁんっ！』

出撃前に宣言した通り、特注の防盾で最大の火線を引き受けているサフィラの喘ぎに重なるように、他の部下たちの悲鳴も無線に混ざり込む。

「サフィラ、ミリア！ 両翼を展開して！ わたくしを頂点とした楔形陣形（ウェッジ）へ移行しなさい……っ、くうんっ！」

MFD《マルチモニター》の片隅で明滅する低解像度の映像越しに、部下たちの艶めかしい悲鳴がアナログ無線で飛び交う。

彼女たちもまた、旧式機の無骨なインターフェースに秘裂を抉られ、戦闘の恐怖と強制的な絶頂の狭間で狂いそうになっていた。

ルナの視界が、赤い非常灯の点滅と、快樂の涙で白く濁っていく。

汗に濡れた素顔は瞬く間に紅潮し、乱れた桜色の髪が汗で頬に張り付いている。

機動力を捨て、巨大な盾で耐え忍ぶだけの第1世代機の戦法。

敵のスウォームが死角へ回り込む前に戦線を突破しなければ、いずれこの無骨な鉄塊ごと十字砲火に押し潰され、肉体も精神も快樂の波に吞まれて完全に崩壊する。

意識が、甘く暗い底へと沈みかけたその時。

純白のパイロットスーツの胸元——極薄の生地越しに伝わる防水ポーチの硬い感触が、ルナの脳裏に一つの情景をフラッシュバックさせた。

『お姉ちゃんが帰ってきたら一緒に食べようと思って、私の分はこっそり瓶に入れて取ってあります』

出撃直前に見つめた、たどたどしい文字で綴られた妹セリナの手紙。

配給の合成プロテインばかりの単調な日々の中で、彼女が大切に取っておいたという、ささやかで甘いドライフルーツ。

『早くお姉ちゃんみたいな、立派で強い聖女になりたいです』

血と廃油の匂いが充満するこの地獄の底で、そのあまりにも純粹で無垢な言葉が、ルナの消えかけた理性に強烈な楔を打ち込んだ。

(わたくしが.....ここで、呑まれるわけには.....ッ！)

妹のあの無邪気な笑顔が、こんな泥に塗れた地獄を見ることのないように。

いつか彼女が戦場に出る時、痛みのない美しい翼で大空を舞うことができるように。

「あああああああっ！！」

ルナは自らの下腹部を焼く絶頂の波を、獣のような咆哮と共に強靱な意志でねじ伏せた。

ガタガタと震える油圧式の操縦桿を、華奢な腕の筋肉が悲鳴を上げるほどの力で握り込み、強引に機体を前へと押し出す。

その凄まじい気迫に呼応するように、真鍮のデバイスから抽出された莫大なオルガエネルギーが、ケルビムのジェネレーターを限界突破させた。

「全機、わたくしの射線に続け！ この程度の泥、わたくしたちがすべて踏み荒らしてあげるわ！」

ルナはフットペダルを力一杯踏み込み、巨大な盾の隙間から右腕の90mmヘビィ・アサルトカノンを正面の敵陣へ突き出した。

カノンのFCS《火器管制システム》が、低解像度の緑色モニターに殺到するハウンドの群れを捉え、測距儀（レンジファインダー）の数字が狂ったように明滅する。

トリガーを引き絞る。

ズドドドオオオオンッ！！

90mm徹甲実体弾が、文字通り暴風となって放たれた。

マズルブレーキから噴き出す莫大な火薬燃焼ガスが周囲の冷気を爆発的に霧散させ、音速を超えた弾頭が連合のAIの予測限界を超え、圧倒的な物理質量で空間をブチ抜く。

その瞬間、凄まじい発砲反動と、姿勢を保つための姿勢制御トルクの強制搾取が同時に発生した。

シート中央の真鍮製デバイスが、ルナの子宮を暴力的に突き上げる超高速のピストン運動へと変換される。

「あ、あ、んっ……！！ひいつ、あああああっ！」

強靱な意志でねじ伏せたはずの理性が、瞬時に真っ白に染まり上がった。

戦果を上げるたびに与えられる、脳の報酬系を焼き切るような圧倒的な快楽。

妹のために撃たなければならない。

しかし引き金を引くたびに、肉体は雌としての恥ずかしい悦びに支配され、子宮がデバイスの硬い感触を求めて自ら蠢いてしまう。

（だめ、こんなの……っ、わたし、きもち、いい……ッ！）

気高いエースとしての誇りと、強制的に引き出される卑猥な快感が完全に矛盾し、ルナの心を激しく切り裂いた。

嬌声を漏らし、とめどなく愛液を散らしながらも、彼女は決して操縦桿を離さない。

強く噛み締めた唇から滲む血の味が、口の中に生々しく広がっていく。

カノンの排莢口から、高熱を帯びた巨大な空薬莢がガシャーン！と甲高い金属音を立てて連続で排出される。

直後、背部のウェポンラッチにマウントされた無骨な自動装填機構が作動。

カチャ、ズオン！という重苦しい油圧音と共に、次弾の90mm徹甲弾がチェンバー（薬室）へと物理的に叩き込まれる。

この泥臭く、野蛮な鉄塊の一連の挙動こそが、第1世代機の意地だった。

90mm実体弾の巨大な質量が、ハウンドの群れを文字通り粉碎した。

軽量の黒鉄装甲など紙切れのようにブチ抜き、内部に詰め込まれた動力源（オルガユニット）ごと物理的に消し飛ばす。

爆炎とオイル、そして生々しい血と肉片の混じった金属破片が、雨のように降り注いだ。

しかし、連合のAI（システム）に恐怖や混乱という概念は存在しない。

後続のハウンドたちは、粉碎されスクラップとなった仲間の残骸を文字通り物理的な盾として前へ押し出し、あるいは一切の躊躇なく踏み潰しながら、無機質な駆動音を立ててルナたちへ殺到してくる。

個体の死や生体部品の損耗を完全に無視した、群れ（スウォーム）としての冷徹な波状攻撃。

その計算し尽くされた無機質な恐怖が、ケルビムを包囲する。

巨大な防盾に無数の火線を浴びながら、血と愛液を代償にした動く城壁が、爆炎とオイルの海を強引にこじ開けていく。

飛び散る黒鉄の残骸と泥を浴びながら、ルナは快樂と苦痛に歪んだ口元に、誇り高く気高い笑みを浮かべる。

胸に抱いた、ささやかな果実の甘い記憶だけをよすがにして。

機体設定『SO-K型 ケルビム(重装甲突撃中隊仕様)』



1. 機体概要

管轄：セラフィック・オーダー（第4防衛拠点・重装甲突撃中隊）

設計思想：『大質量シールドと重装甲による、絶対防衛線維持および前進要塞運用』

洗練された次世代機とは程遠い、二足歩行の重鈍な鋼鉄の巨人。

高機動回避を最初から放棄し、極厚の装甲と巨大な盾で敵の弾幕を正面から受け止めながら前進する「動く城壁」として開発された第1世代主力機。

開発側の無機質な思想とは裏腹に、過酷な運用で命と体液を削られ続ける前線の少女たちからは、自嘲と皮肉を込めて『血と泥で築く動く城壁』と呼ばれている。

神聖な純白だったはずの装甲は、無数の戦闘による硝煙と泥でくすんだ灰白色（鋼鉄色）に変色しており、最前線で血を流し続ける彼女たちの過酷な現実を物語っている。

2. 主要諸元

全高: **13.5m**

重量: **45.0t**(標準仕様)

装甲: 多重チタン合金(灰白色)

総合評価スコア: **75/100**

3. コックピット・システム:『鉄と油の拷問室』

空間設計: スマートな全天周囲ホログラムや電子的な衝撃緩和(サイコ・ミュー)は未搭載。

正面や側面に分割配置された分厚い液晶モニターと、無数の物理トグルスイッチ、真空管、そして重い油圧式操縦桿で構成された極めてアナログな密室。

焦げた廃油と作動油の匂いが常時充満している。

操縦姿勢: セミ・リカンベント方式のシート。

致命的な罫と肉体への代償(オルガデバイス):

シート中央からせり上がるのは、酸化して青錆や黒ずみが浮いた『極太の真鍮製円柱』。

次世代機のような事前の潤滑などなく、冷たい工業用グリスのみでパイロットの秘肉を強引にこじ開け、粗暴な高圧電流と共に生体エネルギーを暴力的に搾取する拷問器具である。

重要ギミック『反動と蹂躪の完全同期』:

被弾の衝撃や、実弾砲の発砲による凄まじい反動はすべて機体フレームを暴れさせ、それがそのまま「真鍮デバイスの超高速ピストン運動」へとダイレクトに変換される。

パイロットは臓腑を抉り抜かれる激痛と理不尽な強制絶頂に理性を白濁させながらも、生身の腕力と気力で重い油圧レバーをねじ伏せなければならない。

4. 特殊機構と脆弱性

旧式ゆえの鈍重さと『過負荷(リミッター解除)』の代償:

機動力が低く、敵の射撃を盾と装甲で耐えるしかない。

絶望的な戦線を突破するためには、コンソールの『安全リミッター』の力バーを叩き割り、オルガエンジンを限界突破(レッドゾーン)させる野蛮な戦術が求められる。

しかしそれは、パイロットからの搾取を致死レベルまで引き上げ、子宮を突き破らんばかりの極限の質量とピストン運動で内側からパイロットを破壊しにかかる「諸刃の剣」である。

5. 武装(第1世代の物理的暴力)

主兵装:90mmヘビィ・アサルトカノン(右腕) 大質量の実体弾を撃ち出す無骨な大口径砲。反動が凄まじく、過負荷状態では機体の推力と腕力で壁に覆い被さり、反動を殺して一点をドリル状に掘り抜く(ゼロ距離定点連射)泥臭い戦術をとる。

防御兵装:多重チタン製・大型防盾(バリケード・シールド)(左腕) 機体の半ばを覆い隠す巨大な盾。弾幕は防げるが、受けた莫大な運動エネルギーはすべてパイロットの子宮への「物理的な衝撃」として還元される。

近接兵装:ヒート・ハルバード(背面) 背部のウェポンラッチに固定された白兵戦用の極厚の斧槍。オルガエンジンのエネルギーで融解寸前まで赤熱させ、滑らかに斬れず「熱で溶かしながら力任せに叩き切る」野蛮な近接兵器。

6. 部隊各機のカスタマイズ仕様

■ ルナ機(小隊長機)

天性のエースであるルナの腕力と「限界突破時の超駆動」に耐えられるよう、各部油圧シリンダーをチューンアップしている。

しかしその分、デバイスの暴れ馬のような搾取も小隊で最も凶悪になっており、彼女の強靱な意志と「妹への祈り」がなければ到底乗りこなせない。

■ サフィラ機（防御特化カスタム）

ルナをサポートする最大の理解者であるサフィラの機体。

他機よりもさらに分厚く、過去の無数の弾痕が重なって黒ずんだ『特注の大型防盾（増加装甲）』を装備している。

部隊に向けられる火線を一手に引き受けるため、機体重量はさらに増しており、パイロットへの衝撃フィードバック（盾受け時の強烈な突き上げ）も小隊で最も過酷な仕様となっている。

■ ミリア機（規律と連携仕様）

生真面目な秀才であるミリアの特性に合わせ、僚機との連携や基本性能を実直に引き出せるよう、教本通りに極めて丁寧に整備された機体。

ルナの背中を的確に守るべく、基礎スペックを忠実に保っている無骨な優等生機。

作品名：鋼の城壁『残月』～カテドラル・ノース防衛戦～

発行日：2026年7月28日

発行者：XYZ_L

連絡先：<https://bsky.app/profile/xyz0080.bsky.social>

【注意事項】

本作には強度の尊厳破壊、生体部品化、および救いのない結末などの過激な表現が含まれております。フィクションとしてお楽しみいただける方のみご閲覧ください。

【AI生成技術の利用について】

本作の表紙および挿絵などの画像は、AI画像生成技術を利用して出力したものをベースに、加筆修正やレイアウト調整を行って作成しております。

【禁止事項】

本作のテキスト、画像を含む一部または全部の無断転載、複製、改変、Web上への無断アップロード（SNS、動画サイト、ファイル共有サイト等を含む）を固く禁じます。
